

他大学・学会との連携に基づく教科指導の研究に関する知識・技法の習得

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亙理, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008949

他大学・学会との連携に基づく 教科指導の研究に関する知識・技法の習得

亘理 陽一*

A report on developing knowledge and research methods of subject instruction in collaboration with other universities and academic societies

Yoichi Watari

要旨

平成 26 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトおよび静岡大学学内 FD 企画スタートアップ助成金事業として、信州大学教育学部の酒井研究室および外国語教育メディア学会中部支部・外国語教育基礎研究部会との合同研究会を企画・実施した。互いの研究室に所属する卒業研究の中間報告・検討を合同で行うことで、相互に指導・助言を受け、異なる環境・視点からの刺激をもたらすことに加え、学生・院生に研究者寄りのニア・ロール・モデルを提供することを企図した。質問紙による学生のふり返りの記述と、前年度のそれとの比較から、合同研究会・講演会の内容・議論、および前後の文献資料の検討・準備の過程で参加学生が得たものを探り、本取り組みの評価を行った。

キーワード： センター・プロジェクト，合同研究会，英語教育，研究法，教員養成

はじめに

本稿は、標記の平成 26 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトおよび静岡大学学内 FD 企画スタートアップ助成金事業の報告である。前年度センター・プロジェクト「他大学との連携に基づく教科指導力の形成・深化に関するアクション・リサーチ」の成果を縦断的に検証し、取り組みを更に深化させることを目的とする。

昨年度の取り組みの成功を受け、今年度も、研究領域や学生の選択進路に類似点が多い、信州大学教育学部の酒井英樹教授の協力を仰ぎ、静岡での合同研究会を実施した。静岡大学亘理ゼミと信州大学酒井ゼミの卒業研究の中間報告・検討を合同で行うことで、指導・助言をもらい、異なる環境・視点からの刺激を相互にもたらすという基本目的は同じである。間接的には、相互交流を通じた英語教員のネットワークづくりも意図した取り組みである。

今年度は取り組みをさらに次の段階へと進め、教科指導の研究法の学習をこの合同研究会の場でもたらしたいと考えた。具体的には、外国語教育メディア学会中部支部・外国語教育基礎研究部会に講演・ワークショップを依頼した。同部会は名古屋大学大学院の博士後期課程・前期課程の院生を中心に運営されており、両大学の学生・院生に研究者寄りのニア・ロール・モデルを提供することになるだけでなく、講演・ワークショップを通じて実際に一連の研究のプロセスを高い

レベルで体験することができると考えた。

研究会の概要

合同研究会は、酒井英樹教授および酒井研究室所属学生の協力を得て、2014 年 9 月 18、19 日に静岡大学教育学部（L 棟 301 室）で実施した。プログラムは以下の通りである。

9 月 18 日

- 13:00-13:15：全体会
- 13:15-16:25：卒業研究中間報告
- 16:40-18:00：ワークショップ（外国語教育メディア学会中部支部・外国語教育基礎研究部会：川口勇作・名古屋大学大学院院生、草薙邦広・同大学院院生／日本学術振興会特別研究員、後藤亜希・同大学院院生、田村祐・同大学院院生、福田純也・同大学院院生／日本学術振興会特別研究員）
- 19:00-21:00：懇親会

9 月 19 日

- 9:00-12:00：講演と質疑
「教科指導研究の専門性：研究の過程と手法」（酒井英樹教授）
- 12:00-12:20：閉会式

亘理研究室からは 4 年生 7 名、3 年生 5 名、修士課程 1 年生 1 名が参加・発表し、酒井研究室は 4 年生 2 名、修士課程 1 年生 1 名が参加・発表した。中間報告は、静岡大学教育学部英語教育専修の卒論・修論中間

* 静岡大学教育学部

発表会と同様の資料を事前に準備・持参し、15分程度の報告の後にそれぞれ質疑応答を行った。全体の進行は筆者と酒井教授が行い、中間報告の司会はホスト校として亙理研究室の3年生が務めた。全体会では、筆者のリードのもと、互いの自己紹介も兼ねた英語コミュニケーション活動が行われた。研究会は公開で実施し、静岡大学学内FD企画スタートアップ助成金事業として3年次専門科目「英語教育リサーチメソッド」受講者を中心とする学生・院生に向けて事前に案内をした結果、全体として29名の参加を得た。

学生のふり返り

このような形で他大学との連携は、彼らの教科指導の研究に関する知識・技法の習得にどのような影響を及ぼしたのだろうか。前年度と同様、質問紙による学生のふり返りの記述から、合同研究会・講演会の内容・議論、および前後の文献資料の検討・準備の過程での彼らの気づきや得たものを探ることにしたい。

2014年12月に、あらためて次の5つの問いに答える形で亙理研究室の参加者に合宿をふり返ってもらった。(1)のみ、昨年度は「英語の指導に関して」と聞いていたが、今年度のプロジェクトのねらいに対応して、「英語教育研究および英語の指導に関して」と変更されている。指定した締切日までの回収率は92.3%であった。

- (1) 今回のゼミ合宿を通じて、英語教育研究および英語の指導に関してあなたが学んだことは何ですか。自由に記述してください。
- (2) 今回のゼミ合宿を通じて見出した、自分の長所や今後の課題があれば教えてください。
- (3) 今回のゼミ合宿を通じて見出した、自分の長所や今後の課題があれば教えてください。
- (4) 静岡大学英語科の学生にとって、この合宿はどういう意味があったと（あるいは、今後も継続した場合、どういう意味があると）思いますか。
- (5) 自分の（希望）進路について、いま現在、感じていることや考えていることを差し支えない範囲で教えてください。

(1)の「合宿を通じて、英語教育研究・英語の指導に関して学んだこと」については、昨年度と同様、一般的な視野の広がりや、英語教師に求められる知識・技能、具体的な指導技術・内容についての気づきが挙げられたが、今年度はさらに、プロジェクトのねらい通り、教育実践を研究として捉える視点や研究過程に関する記述が複数見られた（下線は引用者による。以下、同様）。

- 特に、名古屋大学の方々のお話を聞いて、ミニチュア版とはいえ指導法を研究する過程を見ることができ、これから自分が研究論文を読んで勉強

したり、将来現場に出たときに自分の指導法を反省したりする際に役立つ知識を得ることができました。

- ワークショップを受け、出会ったことのない授業展開を経験し、その授業法を知った。またその活動一つ一つにどんな意味・目的をもって行われていたのか、自分が授業者であった場合どんな活動を取り入れていくかといった、実践的なことも学んだ。また想像もつかないような研究テーマに触れ、自分の中で新たな選択肢が増えたように感じる。様々な人が様々な方法で研究していて、これから自分が英語教育に対してどう向き合っていくのか、どのようなことを学んでいくのかをこの合宿で学んだ。
- 今回のゼミ合宿を通じて、英語教育の研究が数多くなされており、それぞれの研究が相互に関係し合いながら、ひとつの英語教育の進展や改善に向かっている事を学ぶことができました。また、英語の指導においても、今回の模擬授業のように研究のデータを十分に生かす授業など、先行研究を考慮しながら、さらに新たな考えや方法も取り入れていく、さまざまな仕方があることが分かり、第二言語の学習における英語教育の在り方について深く考えることのできる良い機会になりました。
- 信州大学、また、名古屋大学の院生の方々の発表を聞いて、「英語教育」といっても研究内容は様々にあり、自分が知らないこと、考えたこともなかったようなことが研究として行われていることに気付くことが出来た。
- 英語教育研究をする上で、発表を人に見てもらい、フィードバックをもらうことで、より研究へのアイデアや刺激を得ることができることや、他人の研究発表とそれに関する意見を聞くことで、自分の関心や興味が広がり、今後の研究へのきっかけになることを学んだ。
- 自分の研究している分野を専門としていない人たちの考え方や意見は、自分の研究している分野の文献に書かれていることと同じくらい重要な発見があるということ。
- 英語教育研究に関してはあまり見ることのない大学院生の方々の意見交換の場やワークショップなどから、幅広い視野を持つことの大切さを学ぶことができました。特にワークショップでは授業において生徒たちにどのようなアプローチで英語を教えるべきか、という英語の指導に関する新たな視点も学ぶことができました。
- 英語教育と一口に言っても、その方法は一つではなく、たとえば電子機器に頼ったものや、文法に特化したもの、コミュニケーション活動に特化したものなど、個人の色が出るような様々なアプ

ローチがあってもよいということを知りました。とにかく難しい内容の話の聞き、自分の感性に刺激となるものでした。

- 暗示的フィードバックの具体的な例。研究の大きな流れや研究に対する意識の在り方。
- 日本の英語教育をよくしようと多くの研究者が日々研究に勤しんでいることが分かった。また、大学院生による模擬授業を体験させて頂いた中で、とても自然なオーラルイントロダクションを知ることができた。
- 受講者を楽しませるために、役者になることが必要だと気付いた。教師という立場を大事にしすぎると、受講者との間に壁が出来てしまう。学校教育では、ただ英語を教えればよいというわけではない。積極的にコミュニケーションをとり、授業・英語を楽しんでいる姿を示す必要があるだろう。
- 卒論中間発表のあとに名古屋大学の方が授業をしてくれました。There is~/ There are~の単元をオールイングリッシュでの指導してくれました。プロジェクトなどを使ってとてもわかりやすく参考になりました。今まで何回かその単元の授業を見てきましたが1番勉強になった授業でした。

(2)の「見出した自分の長所や今後の課題」については、昨年度は主として対人コミュニケーションにかかわる側面が長所として、多角的・批判的思考が課題として意識されていたが、今年度は総じて、英語教育(研究)に対する知識と経験の不足が自覚されている。そのこと自体は他大学・学会との連携にまず期待していたことだが、当初想像していた以上に、言わば「知」に対する姿勢に感化される部分が大きかったことが窺える。

- 英語を学んでいく際に手に入れた知識はすべて英語教育につながっているということに気が付いた。読み、書き、聞き、話す。異なったスキルのように見えるが、その中には共通して求められている力がある。あらゆる知識をひとつの線でつなぐことが教員を目指す自分には求められている。
- 今回のゼミ合宿では、名古屋大学の院性の方や、信州大学の方の学問の研究に対しての真剣であり、誠実な姿勢を見せていただき、自分には学問に対する、特に教育に関する関心や知識、実践的な経験がまだまだ不足していると感じ、今後の課題としては、まず、自分の中で、なぜ教育を扱う必要があるのかということの根本的な理由を考え、突き詰めていき、その上で、英語教育に携わろうとしている自分の姿勢をもう一度見直していきたいと思います。
- 長所としては、他人の発表をじっくり聞くことが

できたことです。今回私は3年生ということで、先輩方、他大学の院生の方と比べると、その知識量は大きく劣ります。様々な視点からの研究はどれをとっても自分にとって刺激となるもので、少しでも自分の視野を広げ、知識として取り込もうと、必死に聞くことができたことです。課題としては、交流の場で積極的に話をするのができなかったことです。一番後輩ということもあり、緊張のためか話しかけることはあまりできませんでした。自分の知識にするためにも、知識の豊富な方々にせつかくの機会ということで、積極的に話しかければよかったと思いました。

- 今回の合宿で行われた発表会では、先生方や院生の方々の質問、アドバイスの内容を理解することができなかった。論文についての知識、研究法などの理解を深めていなければ、話についていくことすらできないと実感した。本格的に自分の研究を始める前に、まずは自分がこれからやっていくことを理解し、そのために必要な知識を得ることが課題である。
- 自分の長所は人並みまたはそれ以上に英語能力があること。今後の課題は約束事を守ること、気づきを増やすこと。
- 自分の課題として、自分の研究に対する思いと自分の行動とが伴っていないと感じた。他の方々の発表を聞いて、まだまだ知らないこと、知らなければならないことはたくさんあるのに、ある程度調べた現状で満足してしまっている、そんな自分がいたことに気付かされたように思う。
- 見出した課題のひとつとして自分の研究分野に関する統計の方法などの改善点が具体的にわかりました。また上記にもあるとおり、多くの文献や研究などに目を通し、自らの視野を広げることもこれからの大きな課題です。学生のうちにも読める文献は読んでおきたいと感じました。
- 自分の今後の課題は、自分の考えを分かりやすく相手に伝えることである。そのためには事前にその考えを順序立ててまとめておくこと、またその根拠を明確にしておくことが重要だと感じた。
- 自分の卒業研究中間報告の発表を通して、発表の仕方が自分なりの課題になりました。自分ではまとまっていると思って資料を用意しても、実際に人前で自分の思いや理論を伝えることは難しいと感じました。準備不足といえそうですがもしかかもしれませんが発表において求められる能力や工夫について考える必要があると考えています。しかし、いただいた意見を消化して自分の研究に生かしながらさらに進めるという作業はうまくいったように思っています。報告会に限らず様々な場面で積極的に相手の専門分野や他の報告に対する意見を交

換し学びを深められたことは自分の長所が現れた部分でした。

- 自分の長所は初対面の人でもすぐに仲良くなれることです。信州大学の方は去年知り合いましたが、新しく4年生の人たちが入りました。その人たちともすぐに仲良くなることができいろんな意見を交換することができてよかったです。また、今後の課題としては、卒論の中間発表を通してほかの大学の教授の方たちに意見を聞けたのでそれらを卒論に生かしていくことです。
- 人前で話すこと自体も苦手ですが、プレゼンが上手になりたいと思いました。分かりやすいプレゼン資料を作ることもちろんですが、その資料を有効に活用して話す技術も身に付けていきたいです。また、完璧な発表をすることも大事だとは思いますが、意見をたくさんもらえるような発表をすることがこのような場では必要になるのではないかと感じました。
- 研究発表をしてくれた人に、A4一枚分のフィードバックを書き、それぞれに手渡すことで、今後の参考にしてもらった。人の意見を得る機会を最大限に発揮してもらいたいという想いからで、熱心に取り組める自分の長所だと感じた。今回は発表者ではなく、また専門的な知識もないため具体的なアドバイスがしづらい部分もあったが、今後は自分の興味のある分野に対する知識を増やしていかなければならないことを課題として感じる。

(3)の「信州大学の学生の発表や考え方に接して感じたこと」については、お互いの共通点や違いをそれぞれに感じていることがわかる。昨年度同様、両教員の指導スタイルや経験、学部・専攻の「伝統」の違いを反映していると考えられるが、特に初めて参加した3年生には影響が大きかったようだ。

- アプローチが巨理ゼミの先輩方とはまた異なり、とてもいい刺激になりました。特にskypeを利用したコミュニケーション活動については、私もICTに興味があるため、興味を持つことができました。
- 静大の学生とは違った視点から英語教育を見つめていて、興味を引かれる点、参考になる点があった。
- 同じ学年の学生なのに、環境が違うことでこんなに視点が異なってくるのか、と感じた。しかし同時に、研究をやらされているのではなく、お互い何か熱い思いをもって自らの意志で研究に取り組んでいるのだな、ということも感じる事が出来た。
- 信州大学の方の発表を聞かせていただく中で、素直に学問への誠実な姿勢を学ばせていただきました

た。研究をするにあたっての心構えなども併せて学べたように思います。また、研究には、幅広い視点が必要であり、自分の思いや考え方だけでは、研究における進歩はなかなか得ることができないと感じました。限られた世界の中(英語)だけで研究を行うのではなく、心理学や自然科学など、一見関係性が見いだせない分野においても関わりを持っていくと、新たな発見があることが分かり、これからは、物事を多角的に見るように心がけていきたいと思いました。

- 酒井先生は、自分の理論を押し付けたり、他の人の意見を根本から否定することはしなかった。さらに、他大学の学生に自身の知らないことを聞く場面もあった。年齢や教師という立場に関係なく、もっと知識をつけていこうという姿勢がとても頭に残っている。
- 信州大学の学生の発表はパワーポイント等を用いていたので、これからの発表会等では大いに参考になりました。研究の内容に関しても自分たちの研究では見えていない観点のお話であったり、少し似通っていたりして、互いに参考になることが多かったように感じました。加えて、学生のみならずも教員志望の方だったので、互いにこれからの不安や思いを語り合う機会になったので、教員になるにあたって、新たな仲間と出会えたように感じました。
- 2名の学生が発表して下さったが2名ともパワーポイントを使った発表をしていた。パワーポイントで要点のみを提示してプレゼンテーションをすることは、自分の考えがまとまっていなくて難しいことなので、事前の準備がしっかりしていると感じた。
- 昨年度もそうでしたが、静岡大学の学生と同じようなテーマを設定している方がいたので、やはり興味関心に近いものがあるのだと感動しました。また、信州大学の学生の研究は、自分の経験から生まれた疑問からスタートし、先を見据えたテーマであると感じました。現状がどうなっていてどう改善すべきかを考えている自分に対して、新しいことに目を向けているという点でとても影響を受け、自分の視野を広げる機会となりました。
- 信州大学の学生の一人に自分と似たような卒論テーマの方がいました。実験などの方向性は違うけれどもリスニングの基本の部分は重なっておりその方の意見を参考にできたことがよかったです。
- プレゼンの資料が分かりやすかったです。スライド一枚に含む情報量が多くなりすぎると分かりにくくなってしまいますが、信州大学の学生の発表では、見やすい字でスライドに表示する情報量は最低限に設定してあり、それを口頭で詳しく説明

していました。研究の内容に関しては、研究方法がはっきりしていて分かりやすいと思いました。

- 他大学の学生がどれくらいの研究段階で、どういったことを研究しているのかを知るいい機会になった。実際に発表を聞いてみると、面白いことに着眼していたり、具体的に研究手法を考えていること等に関心し、いい刺激になった。また、他大学間で交流ができ、研究発表を通して、人とのつながりを広げることができた。
- (4)の「この合同研究会（を継続すること）の意味」については、(a)教員（志望者）のネットワーク形成、他大学との連携・協力体制に寄与し得る点のみならず、(b)他大学の学生・院生・教員からと交流し、自身の研究についてコメントをもらう機会がモチベーションとなること、(c)前後の準備やフォローアップ活動も含めて継続的に行うことで(a)や(b)がより良いものになることが指摘されている。このような、自分のことを超えて組織的な観点で合同研究会を捉える視点が複数挙がったことは、2年目の著しい成果である。
- 卒論検討は主に亘理先生との二人で行われている。ゼミの時間で発表・検討を行ってはいるが、全員がその内容に精通しているわけではない。多くの知識を持った人から、また違ったアドバイスを受けることができるこの合宿は今後も続けていくべきだと思う。
 - 英語は、そもそもグローバルな視点で考えなければいけない分野なので、常に多くの違った視点や考え方に触れていく必要があると感じます。そのような理由から、他大学の研究や実践を知ること、新たな視点、グローバルな視点を持つことのできる点で、意味のある機会、合宿であると思います。
 - 学科の中だけで英語ができるできないを競うのではなく、周りにはもっと英語ができる人たちがいるといういい刺激を受けることができたため、とても意味のあるものであったと思います。本格的な英語研究にも触れることができ、少し視野が広がったと思います。
 - サークルや部活動などで他の大学の学生と交流する機会はあっても、研究に関して他の大学の学生と交流する機会はなかった。だから、自分が勉強していることに関して他の同年代の学生がどのように取り組み、どのような意見を持っているのかを知ることの出来る貴重な機会になり、本当に良かったと思う。また、多くの研究者に囲まれることで、研究の大変さや奥深さを実感すると共に、自分自身これからもっと研究に頑張って取り組んでいきたいという気持ちにさせられた。
 - この合宿では、普段の授業ではあまり出会えない

こと(博士課程の大学院生や異なった視点・幅広い視野の研究など)が多いと考え、将来教員もしくは大学院進学を志望する学生にとっては大きな意味があると考えます。また自分の研究分野に関して改善点とどうすべきかといったアドバイスもいただける貴重な機会であると考えます。

- 静岡大学英語科の学生にとって、この合宿は良い刺激を受ける意味があったと思う。通常のゼミと同じメンバーだけで合宿を行うのではなく、今回のように他の大学で学ぶ学生と合宿を行うことで、様々な考え方に触れたり、自分の考えを異なる視点から見直したりすることができた。
- 自分から能動的に動かなければ得られない貴重な経験ができ、合宿の二日間自体が学生にとって勉強になるとも意味のあることだと思います。また、外部の方々との交流によって人脈や英語教育に対する視野が広がるという点で合宿後の学習にも意味を持つと思っています。
- 今回の合宿では自分たちの卒論への意見をほかの大学生や教授の方々が言ってくれることがとても意味があることだと思います。また、私たち4年生だけではなく来年発表する3年生の人たちも刺激を受けます。こうやって信州大学、名古屋大学の方たちと交流することでお互い助け合いながら刺激されていくと思います。
- 普段のゼミでももちろん、他の人からの意見を聞くことができ、新たな視点を見出すことはできません。それが他大学の人と合宿をすることによって、より視点が広がり、研究を一步前に進ませることができると思います。また、同じ大学の状況だけを見てるとその現状に甘えてしまいがちですが、他の大学の方々と交流することで刺激を受けることができました。
- 他大学と合同である点、さまざまな年代の学生がいるという二点が非常によかったです。普段一緒に学んでいる学生とは違った視点から物事を考えた意見や、負けたくないという競争心といった、刺激をもらうことができる。また教授や院生の幅広い知識や経験からのアドバイスも、もっと良い研究にしようと思える有効な動機づけになると思う。また合宿を一つの目標とすることで、最終の期限だけでなく、そこに向かって頑張ろうと思える機会でもある。そのため合宿はその当日だけでなく、それまでの準備期間やその後も影響する素晴らしい機会であると思う。継続することで来年メインになる今の三年生も、合宿をひとつの目標として頑張ることができ、また同じように英語教育に携わるもの同士のネットワークも広がり、情報が増えたり、仲間が増えていく。その仲間同士でお互い刺激し合い、よりよい研究や実践がで

きるようになる

- まず第一に、研究の中間地点として位置づけ、この合宿を目途に自分の研究を進められるモチベーションになること、そして、第二に普段発表を聞いてもらえない人たちにより多角的な意見をもらうことができる。また、他の大学との交流は、静岡大学に限らず、もっと広い範囲で研究をより発展させるための大切な活動であると感じる。伝統的に続けていくことで、他大学とのつながりもより強くなり、連携や協力体制を整えることができると思った。

(5)の「自分の(希望)進路についての所感」は、合同研究会とは直接の関係を持たない。しかし学生の記述からは、研究に関する知識・技法の習得が、単に卒業論文・修士論文を完成させるためだけにあるのではなく、教師としての(教科)指導力の形成・深化とも繋がっているという認識を窺うことができる。その意味で本取り組みは、前年度の成果を維持し、さらに発展させることに成功したと言えるだろう。

- 自分は静岡県の高校教師を目指している。教員採用試験を受けなければならないので、英語教育のみならず、一般・教職教養や英語の勉強をしなければならぬ。もちろん、すべてに対して全力で取り組みたいが、一つに集中しすぎると、他がおろそかになる。勉強のバランスを考えていきたい。
- 私は、今、高校の英語教師を目指しています。最近考えていることとして、高校の英語授業の全面英語化についての方針です。それに伴い、小学校や中学校においても、英語で授業の影響が広まりつつあります。その中で、高校は、どこまでの英語力を求められている(教師と生徒の両方において)のか常に考えるようになってきました。日本に限らず、母国語以外を教えることの意味や意義を考えていくことは、重要な課題になると思います。生徒に対して、英語を学ぶ必要性を気づかせるにはどうすれば良いのかについても自分の中では、課題の一つとなっています。生徒自身の英語に対しての姿勢は様々で、それを一つにまとめることがあまり良い考えではないと考えています。その上で、生徒が自分から英語学習に身を入れることの出来る環境を整えていくのが、英語、言語教師の役割だと思っています。
- 合宿を経て、教育を研究するということに非常に興味を引かれた。自分が過去に経験してきた学習法が具体的な数値になって結果が出たり、未知な学習法や英語教育の新たなテーマなどを知ることができ、自分でも研究してみたいと思ったし、もっといろいろ知りたいとも思った。しかし自分

の中ではそれを実践してみたいという気持ちが強く、英語教育だけでなく、様々な教科に生かしてみたいという気持ちから、小学校の先生になりたいと現在は考えている。

- 正直、いきなり担任になってベテランの先生方と同じ立場で仕事をしなければならないということに非常に不安を感じています。今の自分では知識も経験も技術も足りないところだらけですが、子どもたちにとって先生はみんな先生であって、新人もベテランも関係ないので、子どもたちの貴重な時間を無駄にしないようにしていかなければならないと思っています。不安なことは多いですが、自分のやりたい仕事ができる喜びをかみしめて感謝を忘れず努力していきたいです。
- 来年から教員になるにあたり、果たして今の自分の知識は子どもたちに指導するに当たり十分なもののなのか、指導技術は身に付いているのか、時間がたつにつれてだんだん不安に思う気持ちが大きくなっている。しかし、最初からすべてがすべて出来る訳ではないし、今の自分に満足せずにこれからも常に学び続けることが大切なのではないか、と思うので、残りの学生生活で今不安に思っていることを少しずつでも取り除いていきたいと思う。
- 今回の合宿を通じて、さらに学び続ける必要があるという課題が見つかりました。これから中学校教員として学ぶことが多いと思いますが、今回の合宿のような英語の教科の研究にもさらに目を通して、よりよい授業・指導ができるようにしたいと思いました。具体的には、子どもたちに対するアプローチに関して学びたいと思い、こどもの注意・興味を向ける指導や明示的だけでなく暗示的にも伝えられるような授業づくり等に関して研究論文や書籍などから学んでいきたいと思っています。
- 小学校教員を志望しているが、効果的な導入は英語に関わらず、他の教科においても子どもたちの学びに大いに役立つと考えたため、教員になった際には導入をたださらっと流すのではなく、今回見せて頂いた模擬授業のように意図の明確な導入を目指して教材作りをしたいと考えた。
- 高校教員を志願している。おもしろい授業、すごい授業をするために、今学べることをできる限り吸収して、現場に持ち込みたい。大学だからこそ学べることが多くあり、今の環境を最大限利用し、教員に必要な知識、英語能力、英語に限らないその他知識を身に付けたい。

記述内容の特徴・変化

互理研究室の学生の内、昨年度と今年度の合同研究会に参加した者は3名であり、単純な比較はできないが、両年度に対する記述の異同を計量的に確認してお

きたい。記述統計は表1の通りである。昨年度と比べ、平均字数は減少したが、前節で明らかな通り内容の質が下がったというわけではない。昨年度は(5)について比較的長い記述が与えられていたことがこの差の主たる要因と考えられる。

表1. 記述統計

	2013年度 (n=7)	2014年度 (n=12)
文数	119	162
段落数	37	60
総抽出語数	4188	5195
異なり語数	777	781
平均字数	1053.00	729.50
標準偏差	249.00	256.40
最小	624	148
最大	1478	1212

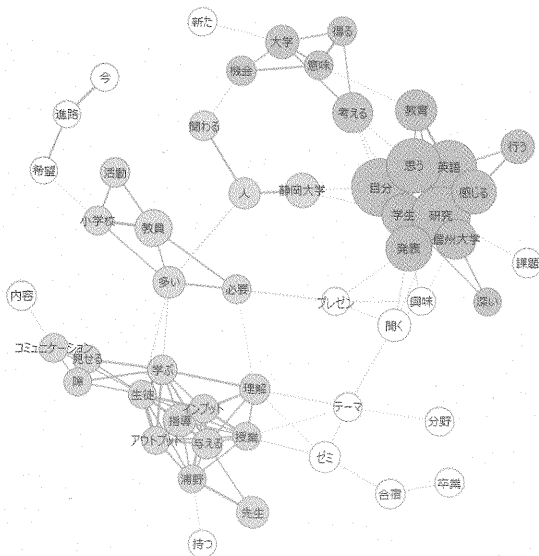


図1. 2013年度の共起ネットワーク

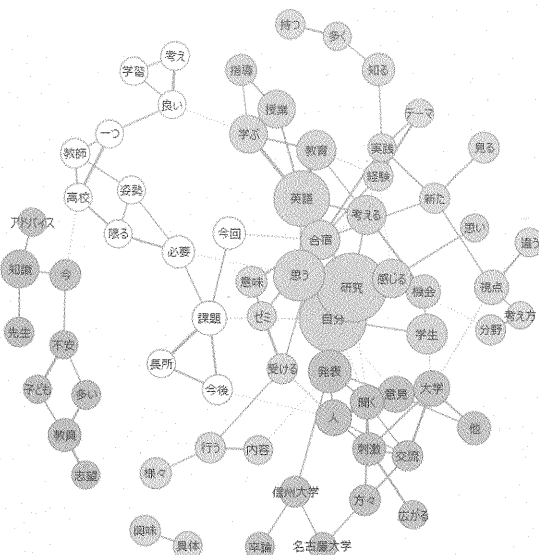


図2. 2014年度の共起ネットワーク

KH Corder (樋口, 2014) を用いて分析を行った。

それぞれについて、語の共起関係を出現数5以上で集計すると図1、図2が得られた(集計単位は段落で、描画数は120)。円が大きいほど当該の語の出現回数が多く、線が太いほど語と語の結びつきが強いことを示している。色の違いは共起関係によるクラスターを示しており、2013年度については信州大学の学生の英語教育に関する研究や発表について自分が感じたことと、授業でのインプット・アウトプットの指導についての記述を中心に、質問項目に対応したクラスターが形成されている。それに対し2014年度は、名古屋大学の院生の影響も加えた同様のクラスターに加え、合宿を通じてもたらされた視点や考え方、今後教師として必要となる知識や姿勢、自身の課題、不安にかかわる記述がクラスターを形成している。注目したいのは、単純に参加人数が増えて記述量が増えたこと以上に、クラスター内・クラスター間の記述の結びつきが強まり、より緊密なネットワークを形成していることが確認できることである。

次に、2014年度の記述を、対応分析によって整理したのが図3である。原点から離れれば離れるほど特徴的な記述であることを示しており、円および正方形の大きさは記述量を示している。これをみると、ゼミ合宿を通じて英語教育研究・英語指導に関して学んだことを中心近くに置いて、信州大学の学生から学んだことと自身の長所や課題が言わば「切磋琢磨」成分として、静岡大学英語科学生にとっての合宿の意味と自分の進路に対する見解が「組織的・歴史的展望」成分として広がっていることがわかる。両成分で学生の記述を説明する割合は62.39%にとどまるものの、前節の解釈を裏付けるような形で学生の記述が分布していることをある程度示せたと言える。

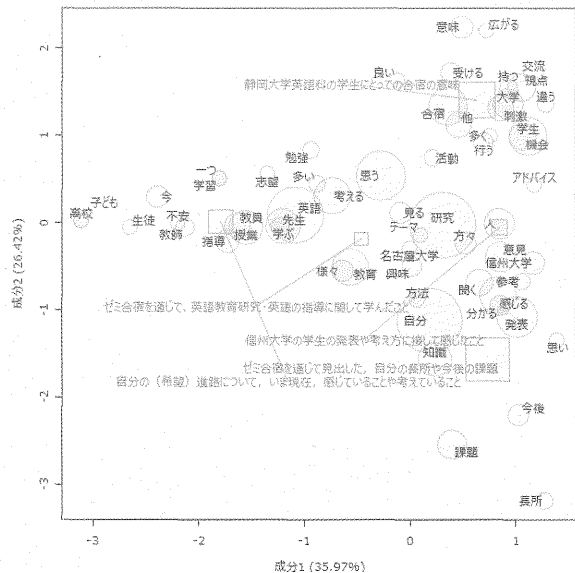


図3. 2013年度の共起ネットワーク

結語

教師が、自分の仕事にやりがいを見出し続けることのできる「反省的実践家」となるには、「自律性」を持った判断主体であることが条件となるだろう。そのためには、所与の理論を相対化し、授業の内在的な検討を表面的なレベルに留まらずに行っていくことが求められる（二杉, 1993）。それは、個人的理論を公共理論・他者の個人的理論に絶えずぶつけ、それをわがものとしていく作業である（Williams, 1999; 亙理, 2014）。その意味において、英語教師は多様な研究法の学習が求められる。彼らにとって卒業論文・修士論文研究は、単なる卒業・修了のための「ハードル」に留まるべきではない。その過程も含めて、教師としての振る舞いや学習指導を原理的に問い続ける「反省的実践家」となっていくための手段と視座の獲得に資するべきである。

合同研究会はこれで一サイクルが完了となり、来年再び長野、再来年は再び静岡という形で継続的实施が予定されている。次年度以降は近隣他大学への拡大も視野に入れ、合宿を経た学生がどの程度実際に教科指導研究の知識・技法を身につけ、自身の研究に活かしたか、そして教科指導力の形成・深化に繋げ得たかを継続的に評価していきたいと考える。

謝辞

本実践は、平成 26 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトおよび静岡大学学内 FD 企画スタートアップの助成を受けて実現した。

合同研究会の趣旨に賛同し、惜しみない協力を申し出てくれた信州大学・酒井英樹教授、外国語教育メディア学会中部支部・外国語教育基礎研究部会のメンバー、および参加者にここで改めて御礼を申し上げる。また熱心に参加・協力し、ホスト役としても尽力してくれた静岡大学亙理研究室の 13 名に心から感謝を表したい。

引用文献

- 二杉孝司 (1993). 「教師の指導性と子どもの主体性：『教職専門性』とは何か」『授業づくりネットワーク』74, 100-105.
- 樋口耕一 (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 亙理陽一 (2014). 「教員養成課程における研究法指導の意義と課題：英語教育リサーチメソッドの実践」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』45, 105-115.
- Williams, M. (1999). Learning teaching: A social constructivist approach – theory and practice or

theory with practice? In H. Trappes-Lomax & I. McGrath (Eds.), *Theory in language teacher education* (pp. 11-20). Harlow, UK: Longman.